

校内別室の環境（生徒が自分の状況により、居場所を選べる部屋づくりと生徒を取り巻く大人の連携）について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校のときから不登校であり登校しない日が多かった。中学校に入学し、4月当初は登校していたが、次第に欠席が続き、登校しなくなった。友人とのコミュニケーションが苦手で、集団での学習は難しかった。担任やＳＣ等との関わりを続け、校内別室ができて登校するようになった。

具体的な取組

○別室の環境（配置の工夫）

別室において他の生徒に見られたり、話しかけられたりすることに強い緊張を感じるため、学習机を校庭の向きにし、集中して自習ができるような座席の配置とした。また、座席を横１列に配置することで、自分一人の空間を保てるようにした。

○教室環境（教具の工夫）

一人一人の空間が保てるように、それぞれの空間の間にパーティションを配置した。生徒に圧迫感のないよう背が低めのものを利用している。



○教育支援センターとの関わり

以前、学校に行く気がしないときは、教育支援センターに通う時期もあった。

学校に登校するようになってから、教育支援センターの支援員が校内の別室に来校し、校内別室指導支援員と連携して、進路に必要な面接指導や作文の指導を行った。

○ＳＳＷ・ＳＣとの関わり

校内別室指導支援員やＳＳＷ、ＳＣと連携し、当該生徒の様子や思い、保護者の思いを踏まえ、進路を一緒に考えた。また、高校受験に関する取組の進み具合を校内別室指導支援員と確認しながら、高校見学や進学先の情報を共有し、当該生徒に合った進路を考えることができた。

成果

当該生徒は、校内別室ができるまで、週１日１時間、ＳＣと担任と関わり、給食を保健室でとるという登校状況であった。校内の別室が利用できるようになり、欠席は学期に２日だけになった。毎日コンスタントに登校できるようになっている。

課題

１つの部屋、一人の支援員だけでは、対応できる生徒に限られてしまうため、より丁寧に対応するために、場所と支援員が必要である。

生徒のペースに合わせた別室登校について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生であり、中学校 1 年生の頃は週 1 回程度の登校であった。登校した際は一日校内で過ごせるが登校時数が安定していなかった。友人とのコミュニケーションが苦手で、人との付き合いに疲れてしまったり、欠席が続くことで学習面の遅れに不安を感じたりしていた。現在、校内別室には午前中 2 時間、週 4 日登校をしている。

具体的な取組

○校内別室での個別学習

原則、学習用具を持参し、自習することがルールとなっている。学校で配布されている問題集、個人で購入した漢字検定の問題集、端末を使つての学習ソフトなどに取り組んでいる。分からない問題等は校内別室指導支援員と一緒に学習し、自分のペースで学習を進めることができ、理解が自信につながっている。

○少人数での関わり

「人は好きだけど苦手」という発言から関わりをもちたいけれどそれによって疲れてしまうもどかしさを抱えている様子が伺える。校内別室では、少人数で同じ顔ぶれで利用することが多いため、相手の性格を理解し楽しく会話する場面も見られるようになった。



○ＳＣとの連携

週 1 回、定期的に ＳＣ との面談を行っている。興味のある分野について、他人と話すことが大好きで、相談事をするよりは趣味の話をする時間になっている。必要に応じて情報交換を行い、連携を取っている。

○クラスの子との関わり

在籍学級の生徒との関わりはもてないため、校内別室に学級の友達がプリントを持ってきてくれた際に関わることがある。保護者から給食を学校で食べさせたいという思いを受け、言葉かけを続けた結果、校内別室で食べることもある。

成果

別室指導開始時は週に 2・3 回だった登校頻度が中学 2 年生になってからは週 4 回に安定し、前向きに登校できている。過ごし方も静かに自習するのがほとんどだったが、他の別室利用者と楽しく話をすることもできるようになった。

課題

集団への苦手意識は抜けておらず時間をずらしての登下校をしている。学級との関わりをもてるようにして苦手意識を減らしていきたい。

一人一人のよさを生かす居場所の提供を目指して

不登校児童の状況

対象児童は、集団での活動に対する苦手意識や不安感が高い。感覚過敏であり、集団での生活が困難である。小学校 1 年生後半から学級での困り感を訴えるようになり、思いどおりにならないことがあると癇癪を起こし、気持ちが落ち着くまで時間を要した。それから徐々に登校を渋るようになった。

具体的な取組

○見通しをもった活動計画

学習活動を前日または当日と一緒に考える。様々な学校行事については、事前に伝え、どのように参加するか相談する。



○校内別室の活用

当該児童の興味・関心に基づいた教材を準備し活動意欲を高める。季節に合った教室掲示を利用する児童と一緒に作る中で居心地のよい教室を作る。



○全教員で関わる支援体制

週 1 回の支援会議で情報共有することで児童に合った声かけができる。効果的だった指導法とその要因を共有し、今後の支援に生かしている。

緊急時対応表を作成し、担任だけでは対応できないことが起きた際に素早く対応できるような補教体制を構築している。

○異年齢集団での交流を通じた、人間関係の構築を図る

週 1 回の「縦割り班活動」で遊びと話合いの活動を通じて居場所づくりときずなづくりにつながっている。

上学年になると役割があり、それぞれの役割を果たすことで自己有用感の醸成につながっている。

成果

週 2 日程度だった登校日数が週 4 日程度に増え、11 月からは、毎日登校できる日が増えてきた。挨拶をしても返事がなかったが、声をかけると返事ができる場面が増えてきた。

別室から出て異学年交流や休み時間など友達と関わる場面が増えてきた。放課後にも友達と楽しく遊ぶ姿が多く見られるようになった。

課題

校内組織で支援計画を立て、実際に支援・指導を行う際にも校内別室指導支援員 1 人を含めた組織で対応すること。

中学校 3 年生の生徒への支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学入学後、感情の起伏があり、教室で泣き出すことが何度かあった。医師からは適応障害の診断を受けている。2 年生の後半は授業に参加できる日があったが、3 年生では倦怠感により欠席することが多くなった。体育大会や修学旅行にも参加を希望していたが、参加することはできなかった。

具体的な取組

○当該生徒との関わり

学級担任と対象生徒との関わり方や生徒間の関係づくりに向けた打合せを行い、生徒の状況に合わせた対応を行った。具体的には、一緒に昼食をとる・教科指導（主に数学）・進路相談（高校進学に向けての概論）・体育館を利用した体力づくり（球技）・世間話・絵画制作・読書など生徒の興味や関心事を受け、それに合わせた支援を行った。

○組織的な対応

校内委員会を定期的開催し、対象生徒の現状の説明、教員や支援員と情報共有し、組織的な対応を行った。また、当該生徒や保護者に校内別室の情報提供と普及啓発に努めた。

○外部機関等との連携

教育支援センター、子ども家庭支援センター、児童相談所の外部機関等と連携し、当該生徒を外とつなげ、相互に情報交換を行い、専門的な意見及び助言をいただいた。インターネットで他の中学校の別室利用の事例報告書や活動報告書を閲覧し、生徒支援に役立てた。

○環境づくり

パーティションで区切るなどして個別スペースをつくり、安心して静かに学習に取り組める環境づくりを行った。また、負担にならない程度で、他の別室利用生徒との関係づくりを行い、別室にいても孤独感が芽生えないよう工夫した。



成果

現状では登校するのは週 2、3 回、1 時間程度になった。自習だけでなく、支援員と雑談することが増え、笑顔が見られることも多くなった。また、希望する進学先の候補も見付かり、将来に向けてのビジョンが見え始めている。

課題

体調の良いときは、別室登校ができるが、感情の起伏がある時の組織的な対応が課題である。

別室指導による不登校児童への対応について

不登校児童の状況

対象児童は、家庭環境が複雑で、その影響を受け、生活リズムが乱れ、朝起きられない。家庭も送り出しができない状況から不登校になる。当該児童の登校意欲や保護者の養育意識が低く、家庭との連携も難しい場合がある。

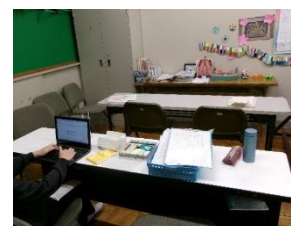
具体的な取組

○一日のスケジュール表の活用

- ・校内別室に朝登校すると、一日のスケジュールを決め、見通しをもてるようにする。
- ・スケジュールを基に一日を振り返り、当該児童へのフィードバックを行う。
- ・取り組んだ内容や、振り返りは担任と共有し、保護者にも伝えることで当該児童への励みとする。

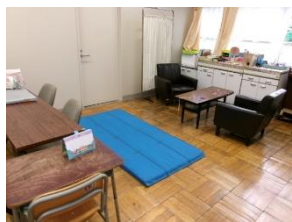
○学習の支援

- ・担任と連携し、取り組む学習内容を検討する。
- ・教室の授業とオンラインでつながる時間を設定する。
- ・当該児童の学習状況に合わせて支援を進める。



○他の児童との関わり

- ・個別の時間と、交流の時間を分け、他の児童と関わる時間や場を設定する。
- ・共同製作、運動など様々な活動を通して交流の機会をつくる。



○教室復帰の支援

- ・当該児童が所属学級に戻る場合も、校内別室指導支援員が学級に入って見守りや支援を継続する。
- ・教室で過ごす時間が増えても、当該児童の不安等により、別室指導を利用できるようにして、安定した学校生活を目指していく。

成果

- ・SSW、子ども家庭支援センター、担任と連携して支援を続け、児童の前向きな気持ちにつながることができた。
- ・1年間の支援後、翌年からは別室指導をほとんど利用することなく安定した学校生活を送ることができている。

課題

- ・家庭の状況は不安定なため、今後も当該児童に影響が出ることが考えられるため、継続した見守りが必要である。

外部機関との連携・組織的な対応・継続的な指導について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校高学年で、中学年の頃から休みがちであった。保健室登校をしていた時期もあったが、徐々に登校してから教室に行けるようになった。しかし、家庭環境の変化により、再び登校ができなくなった。

具体的な取組

○校内別室指導支援員の指導・支援
生活指導夕会や不登校対応委員会で登校状況を組織的に確認している。早期にＳＣや校内別室指導支援員等につなげ、週１回ＳＣとの面接や別室指導を行った。

また、別室の机等の配置を工夫して学習に集中できるような環境を整備した。



○個別支援シートの作成・校内の情報共有

個別支援シートを作成し、支援計画を校内別室指導支援員と共有して指導している。家庭状況の変化に伴い、支援内容について検討し、修正しながら中学進学に向けて継続した登校ができるよう支援している。

○ＳＳＷ・教員による登校支援・関係づくり

３年生後半からＳＳＷの関わりがあり、外出できるようになった。その後、登校支援をすれば登校できるようになった。口数が少なく、在校中はほとんど話すことがなかったが、登校時や別室では、学習に関係のない会話を心がけることで少しずつ笑顔を見せ、自分から話をするが増えた。高学年になる頃には、教室で過ごせる時間も増えていた。

○組織力の向上

不登校対策委員会が中心となり、ＳＣやＳＳＷと担任の連携を図る機会を設けるようにしてきた。また、個別のケース会議を開き、子ども家庭支援センターや関係している中学校や関係機関との連携、今後の方針について共有することができた。

成果

現在、週２、３日のペースで継続的な登校が続いている。

別室だけでなく、教室で過ごす時間もあり、友達もいるため、長期間休みが続いたときには友達が家に顔を出すなど友達との交流ができるようになった。

課題

登校はできているが、30日以上欠席の児童は増えている。担任や養護教諭、校内別室指導支援員で信頼関係を築き、人とのつながりを広げていくようにして、多くの教職員と関わられるような支援体制や職員の意識を高めていく。